

銭湯でバイトするJD、男湯の清掃
で同級生と鉢合わせておちんちん
ガン見！

大学のキャンパスは秋の陽射しを浴びて、少
しずつ色づき始めていた。昼休み、美波は文
学部の友達、理香と一緒に校舎の近くにある
カフェで時間を過ごしていた。

「ねえ、美波、最近どんな本読んでる？」理香
がコーヒーを一口飲みながら聞く。

「最近は村上春樹の新刊を読んでるよ。理香
は？」美波は明るい声で答えた。

「私は最近、ミステリーにはまっててさ。アガ
サ・クリスティの『そして誰もいなくなった』を
読んでるんだ。でも、村上春樹の本も好きだ
から、また貸してね。」理香は笑顔で答え、美
波も笑みを返した。

「もちろん！あ、そういえばさ、昨日、すごいことがあったんだよ。お母さんが猫を飼いた
いって言い出して、家族会議になったの。」美波は話題を変え、他愛もない日常の話を始めた。

「え、美波の家で猫？意外だね。どんな猫を飼うの？」理香は興味津々で聞き返す。

「まだ決めてないんだけど、お母さんがかわいい子猫を見つけたらって言ってて。私は黒猫が好きかな。」美波は笑いながら話した。

「黒猫、いいね。なんかミステリアスで。ねえ、猫の名前は何にするの？」理香は楽しそうに話を続けた。

「それがまた、家族全員で大議論になっちゃってさ。まだ決まってないんだ。理香なら何にする？」美波は理香の意見を求めた。

「私なら...『シャーロック』かな。推理小説の影響かもね。」理香は冗談めかして答え、二人は笑い声を上げた。

「それとさ、最近新しいバイト始めたんだ。」美波が話す。

「バイト？あ、銭湯だっけ？」理香は興味を示した。

「そう、女湯の清掃と受付をしてるんだけど、」

「銭湯のバイトって楽しそうだね。でも、男湯にも入るの？」理香がからかうように言った。

「入るわけないでしょ！女湯だけだよ。」美波は笑いながら答えた。

「バイトどう？楽しい？」理香がさらに聞いた。

「まあ、色々だね。お客さんへの接客とか、意外と大変なんだよ。ただ、楽しいことも多いから、続けてるんだ。」美波は微笑んだ。

「そうなんだ。どんな楽しいこと？」理香は興味深そうに聞いた。

「お客さんの中には、毎日来る人もいてさ。顔見知りになると、色々な話を聞かせてもらえ

るんだよね。今日はこんなことがあった、みたいな。」美波は楽しそうに話した。

「それ、ほんと楽しそうだね。私も新しいアルバイトしたくなってきたよ。」理香は笑顔で言った。

その会話をした日の夕方、美波はいつものように地元の銭湯にアルバイトへ。しかし、今日は少し違った。スタッフルームで先輩の沙織が美波に近づいてきた。

「美波、今日はちょっと急なんだけど、人数が足りないから、男湯の清掃お願いしてもいいかな？」沙織は困った顔で言った。

「え、男湯の？私？」美波は一瞬驚いた表情を浮かべた。

「うん、急にスタッフが一人来れなくなっちゃってさ。でも、美波なら大丈夫だよ。とりあえず床とか洗い場重点で掃除してくれればいいから。」沙織は優しく笑い、美波の肩に手を置いた。

「でも、男湯なんて…」美波は少し不安そうに言った。

「大丈夫、美波なら問題ないよ。」沙織はそう言って、美波に掃除道具を渡した。

「本当に大丈夫なのかな…」美波は不安を隠せずに言った。

「大丈夫、大丈夫。美波が緊張しないように、私がたまに様子を見に行くよ。お客さんに気づかれないように、さりげなくね。それに、笑顔で接すれば、みんな優しくしてくれるから。」沙織は美波を励ました。

「わ、わかりました。やってみます。」美波は少し緊張しながらも、沙織に頷いた。

「ありがとう、沙織さん。気をつけます。」美波は笑顔で答えたが、内心では緊張が募っていた。

「本当にありがとう。美波がいてくれて助かるよ。もし何かあったら、すぐに言ってね。」沙織は最後に言い添えた。

美波は掃除道具を手に、男湯の扉をそっと開けた。湿気と蒸気が一気に押し寄せ、彼女は視線を下げ、なるべく目立たないように中に入った。そこには、洗い場で身体を洗う男性たちの姿があり、湯船からはリラックスした表情の人々が見える。